第５章　生徒・個人のコスト負担

５－１．受験料（評価料）

ＤＰ資格を取得するためには、高校３年生（１２年生）の５月または１１月（日本の高校の場合は１１月が一般的）に実施される全世界共通の試験を受けて合格する必要がありますが、ここではその受験料（評価料）について説明します。

一人あたりの受験料は、以下のとおりになっています[1]。

試験登録費 （受験のためまず全員に必要な費用）	１８４シンガポールドル（ＳＧＤ）：約１万６千円
科目毎の試験料	１２６ＳＧＤ：約１万１千円
コア（ＥＥ）	９７ＳＧＤ：約８千円
同上（ＴＯＫ）	４９ＳＧＤ：約４千円
同上（ＣＡＳ）	１１ＳＧＤ：約１千円

フルディプロマ（ＤＰ資格全体）の取得のためには、原則として６グループから１科目ずつ履修し、さらにコア３要件を履修する必要があるため、生徒一人あたり、

１８４＋１２６×６科目＋９７＋４９＋１１＝**１０９７ＳＧＤ：約９万３千円**[2]

の受験料をＤＰの２年目に国際バカロレア機構に支払う必要があります。一般的には、学校はこの受験料を授業料に上乗せして生徒に支払ってもらうことになります。

なお、この試験に失敗して科目の Certificate を取得できなかった場合でも、再受験することは可能です。その際には、上記の受験料を再度支払うことになります。

[1]金額は２０１５年のものであり、今後変更される可能性があります。また、本章の内容は２０１５年（平成２７年）９月１日（終値）時点のレート（１ＳＧＤ≒８４，５円）で計算しています。

[2] 同上

５－２．教材費

第９章で後述しますが、ＤＰで用いる教材は国際バカロレア機構が指定しているわけではなく、学校が独自の判断で選定しています。したがって、教材購入にかかる費用は学校によって様々です。

しかし、一般的な傾向として、教材費はＤＰコースを履修する生徒に負担させるケースが多くなっています。授業料に上乗せさせるか、教材費として別途徴収するかは各学校の判断となります。（中には、参照するだけの教材は貸与制として学校が購入し、書き込みを行う可能性のある教材に限って個人負担を求める学校もあります。）

コラム③『国際バカロレアは生徒にとって金銭負担が大きい？？』

「ＩＢはとにかくお金がかかる・・・」

上記の評価料を含め、授業料や教材費など、ＩＢにはなにかと出費が伴いがち。そのような声をよく聞きますが、本当でしょうか。科目の予復習をはじめ（ディスカッション・ベースの授業なので、しっかり自習しなければ授業に付いていけません！）、ＴＯＫ，ＥＥ，ＣＡＳのための自主研究などで多忙を極めるため、ＩＢ生に塾に通う時間が確保できないことは、ある意味「常識」です・・

一方、普通の高校生でも、日本の家計データを見ると、「学校外」での教育費（通塾費など）にかける金額は平均で約２４万円/年となっています。（私立高校生の場合の補助学習費。文科省「平成２４年度子供の学習費調査」より）

これを見ると、ＩＢ生だからといって、必ずしも普通の高校生と比べて多額の教育費がかかってしまうということはないと言えるのではないでしょうか。

第６章　奨学金

第５章でも触れましたが、ＤＰを履修する生徒にとって受験料（評価料）は大きな負担です。そこで、このたびＤＰ受験料を支援対象とする新しい財団が創設されました。これにより、世帯所得の低い家庭の生徒でも安心して国際バカロレア（ＩＢ）を履修できる環境が整ってきました。ここでは、簡単にその奨学メニューを紹介します。

６－１．世界で生きる教育推進支援財団による個人負担への支援

ＤＰを受ける生徒の世帯には、前述のＤＰ資格を取得するための受験料の負担のほか、ＩＢのプログラムを受ける上で必要となるＰＣやタブレット端末、数学などの授業で使用するグラフ電卓の購入経費などが追加の負担となります。

そうした生徒の世帯にかかる負担によって、生徒・保護者がＩＢ教育を諦めることのないよう、「世界で生きる教育推進支援財団」では、世帯の所得に応じて、受験料の助成・物品の貸与を行っています。

①　受験料（評価料）の助成

世帯の所得に応じて、卒業試験料の全部又は一部（５０％、２５％）を助成します。

②　物品の貸与

ＩＢを受けるのに必須な物品であるＰＣ・タブレット端末やグラフ電卓を貸与します。

（事業の詳細については、財団のＷＥＢページ（http://www.sekaideikiru.com/）を参照ください。）

コラム④『世界で生きる教育推進支援財団の目的』（寄稿）

日本は今まさに教育の転換期を迎えようとしています。今夏、文部科学省がはじめて、国際バカロレアと学習指導要領の双方を無理なく履修できる教育課程の特例措置を新設しました。また、日本語ＤＰの開発によって、日本の子ども達が母語で国際バカロレアのＤＰを学ぶことが出来るようになりました。

本財団は、日本の教育現場に新しい教育を導入することを目指していくとともに、金銭的なサポートも行っていくことを目的として、2014 年１１月に設立しました。国際バカロレアのプログラムが導入されることで、子ども達に教育の選択肢を提供することが出来るようになります。

より多くの子ども達に国際バカロレアのプログラムを学ぶ機会が提供できることを期待しています。今後も文部科学省とともに国際バカロレアの導入を推進していく考えです。

（世界で生きる教育推進支援財団理事長　坪谷・ニュウエル・郁子）

第７章　ＩＢカリキュラム

７－１．ＩＢカリキュラムの概要

ＤＰカリキュラムは、１から６の各グループおよびコアとなる３要件（ＥＥ（課題論文）、ＴＯＫ（知の理論）、ＣＡＳ（創造性・活動・奉仕））から構成されます。（カリキュラムの詳細は１－２を参照ください。）

学校教育法第一条に定める学校で、国際バカロレア（ＩＢ）を導入・実施する場合、我が国の学習指導要領に加えてＤＰのカリキュラムを履修することとなります。ただし、単に授業時間数を増加させて対応するということでは、生徒の負担が過重になってしまいます。そこで、文部科学省では、国際バカロレア・ディプロマ・プログラム認定校においてＤＰのカリキュラムを円滑に実施することができるよう、７－２に示す特例措置を講じました。

７－２．国際バカロレア・ディプロマ・プログラムの導入を促進するための教育課程の特例措置について

学校教育法施行規則を改正し、国際バカロレアと学習指導要領の双方を無理なく履修できる特例措置を新設しました（平成２７年８月１９日に、公布・施行）。具体的には、以下の内容を告示で規定しています。

① 学校設定教科・科目として設置したＩＢＤＰの科目について、生徒の負担を軽減するために、卒業に必要な単位数に算入できる上限を拡大（２０単位⇒３６単位）すること。
② 英数理の必履修科目及び総合的な学習の時間については、関連するＩＢＤＰ科目の履修をもって代えることができること。
③ 国語以外の教科等については、英語による指導を行うことができること。

第８章　評価

ＤＰ資格を取得するためには、１から６の各グループから原則１科目ずつ履修することに加え、３要件（ＥＥ、ＴＯＫ、ＣＡＳ）を履修する必要がありますが、生徒はそれぞれの科目につき評価を受けることになります。

配点は、各グループの科目は、それぞれ７点満点、コアとなる３要件のうちＥＥとＴＯＫをあわせて３点満点として計算されます。数式で説明すると、

ＤＰ資格（４５点満点）＝グループ科目６科目×７点（４２点）＋ＥＥおよびＴＯＫ（３点）

ということになります。（※ＣＡＳは点数評価の対象になっていませんが、修了できなければＤＰ資格を得ることはできません。）
なお、「原則２４点以上」を獲得した場合に初めてＤＰ資格が付与されます。

＜１から６の各グループの科目の評価方法＞

各グループの科目の評価は、外部評価と内部評価に分かれます。このうち、外部評価として最終試験（筆記）および最終試験に先立って生徒が提出するレポートなどがあり、これらが評価全体の約７０％を占めます。また、内部評価としてレポートや口頭試問等があり、これが残りの約３０％を占めます。

外部評価は専門のＩＢ試験官が行います。一方、内部評価は各学校の教員が、ＩＢの評価方針に基づいて行うことになっていますが、評価結果のサンプルをＩＢ試験官にも送付する必要があり、試験官と教員が異なる評価を行った場合には、点数が調整されることもあります。（これは「モデレーション（評価の適正化）」と呼ばれます。）

＜ＥＥ（課題論文）の評価方法＞

ＥＥの評価は、ＩＢ試験官が行います。１１の観点別評価により行われ、グレードＡからＥおよびＮの６段階で評価されます。ＥＥはＴＯＫとあわせ、最高３点で評価されます。

＜ＴＯＫ（知の理論）の評価方法＞

ＴＯＫの評価は、ＩＢ試験官の採点によるエッセイ（６７％）および各学校教員の採点によるプレゼンテーション（３３％）により行われます。グレードＡからＥおよびＮの６段階で評価されます。ＴＯＫはＥＥとあわせ、最高３点で評価されます。

※　本節で記載した内容につき、詳細を知りたい方は、国際バカロレア機構が作成している「ＤＰ手順ハンドブック」をご参照ください。評価に関する具体的な時期や内容・方法について詳しく記載されています。
（Resources for Schools in Japan: http://www.ibo.org/en/about-the-ib/the-ib-by-region/ib-asia-pacific/information-for-schools-in-japan/）

第９章　教材

ＤＰを実施するにあたって、国際バカロレア機構の指定する教材はありません。したがって、各学校においては、コーディネータおよび教員の判断で、使用する教材を選択することになります。

ただし、「日本語Ａ：文学」および「日本語Ａ：言語と文学」においては、国際バカロレア機構が指定する「指定作家リスト（ＰＬＡ: Prescribed List of Authors）」及び「指定翻訳作品リスト（ＰＬＴ: Prescribed List of Translations）」のリストの中から使用する教材を選択することになっているため、注意が必要です。（ＰＬＡにおいて選択するのは作家のみで、作品は各学校で選ぶことができます。）

なお、日本語ＤＰ教科については、日本語の教材（我が国の検定教科用図書を含む。）を使用することも当然ながら可能です。

イメージを持っていただくため、参考までに現在ＤＰ校がどのような教材を使用しているかを次ページ以降で紹介します。

国内のDP認定校（一条校）で使用している教材例

※ここに掲載しているのは実際に使用されている教材のうちのごく一部です。また、国際バカロレア機構または文部科学省がこれらの教材の使用を推奨しているというわけではありません。あくまで参考のものとお考えください。

English	English A and B : Oxford University Press, Cambridge University Press, Pearson Education, and etc. [English A] Hamlet by William Shakespeare Kokoro by Natsume Soseki The Book Thief by Markus Zusak A Clockwork Orange by Anthony Burgess Rosencrantz and Guildenstern Are Dead by Tom Stoppard Selected short stories by Alice Munro Macbeth by William Shakespeare The Analects of Confucius（論語） Tao Te Ching（道徳経） Vor dem Gesetz by Franz kafka　掟の門（フランツ・カフカ） Bunsho Dokuhon by Tanizaki Junichiro　文章読本（谷崎潤一郎） Genji Monogatari<The Tale of Genji> 源氏物語（紫式部） The Poetry Works of Takamura Kotaro　高村光太郎詩集 Konjaku Monogatarishu　今昔物語集 Nippon Eitaigura (Ihara Saikaku)　日本永代蔵（井原西鶴） Shinshaku Shokokubanashi(Dazai Osamu)　新釈諸国噺（太宰治） Ao no Jidai(Mishima Yukio)　青の時代（三島由紀夫） Nobou no Shiro(Wada ryo)　のぼうの城（和田竜） Shiji（Sima Qian）史記（司馬遷） Kokusenyakassen国姓爺合戦（近松門左衛門） Out of My Mind Things fall apart A hand maid’s tale Do Android’s dream of electric sheep The Great Gatsby by F.Scott Fitzgerald Poetry of Gwendolyn Brooks The Crucible by Arthur Miller Grendel by John Gardner Persepolis by Marjane Satrapi Flowers for Algernon by Daniel Keyes Lord of the Flies by William Golding The Catcher in the Rye by J.D. Salinger Thousand Cranes by Yasunari KAWABATA Nineteen Eighty-four(New Windmills) by George Orwell [English B] The Giver American Born Chinese The Scarlet Letter by Nathaniel Hawthorne

Japanese	[Japanese A] 「マクベス」シェイクスピア 「異邦人」アルベール・カミュ 「カンディード」ヴォルテール 「在りし日の歌」中原中也 「羅生門」「藪の中」芥川龍之介 「様々なる意匠」「Xへの手紙」「私小説論」小林秀雄 「人間失格」太宰治 「仮面の告白」「春の雪」三島由紀夫 「雪国」川端康成 「星々の悲しみ」宮本輝 「重力ピエロ」伊坂幸太郎 「蠅の王」ウィリアム・ゴールディング 「こころ」「草枕」夏目漱石 「ダブリナーズ」ジョイス 「夕鶴」木下順二 「月に吠える」萩原朔太郎 「徒然草」兼好法師 「野火」大岡昇平 「舞姫・阿部一族」森鴎外 「砂の女」安部公房 「陶淵明の詩文数編」陶淵明 「山月記・李陵」中島 敦 「枕草子」清少納言 「友達・棒になった男」安部公房 「死者の奢り・飼育」大江健三郎 [Japanese B] 「カラフル」森絵都 「鼻」「蜘蛛の糸」「杜子春」芥川龍之介 「物語のある広告コピー」パイインターナショナル 「デューク」江國香織
History	・Oxford IB Diploma Programme 20th century world History Course Companion ・「グローバルワイド最新世界史図表」第一学習社 ・First Publications Dates Used/Authors in Bold Type)Oxford University Press 20th Century World History: Course Companion 2009 Cannon, Jones-Nerzic, et al ・Pearson Baccalaureate 20th Century World: Causes, Practices, and Effects of Wars 2010 Rogers and Thomas ・Pearson Baccalaureate 20th Century World: Authoritarian and Single-Party States 2010 Mimmack, Price, and Senes ・Pearson Baccalaureate A Comprehensive Guide to Paper 1 2009 Mimmack, Price, and Senes ・Hodder Education Access to History: The People's Republic of China 1949-1976 2012 (2nd Edition) Lynch ・Hodder Education Access to History: The USA and Vietnam 2012 (3rd Edition) Sanders ・International Baccalaureate IB Prepared Study Guide: History SL and HL 2012 Miller and Woodfin ・その他、各種新聞やDVDなど

Chemistry	Chemistry Course Companion, Oxford, 2014 Higher Level Chemistry 2nd Edition Book + eBook (Pearson International Baccalaureate Diploma: International E) 「2014 EDITION CHEMISTRY」OXFORD、HGS分子構造模型C型セット
Mathematics SL	IB Mathematics Standard Level Course Book: Oxford IB Diploma Programme" (Oxford University Press) HAESE Mathematics SL 3rd Edition(Text&CD)、HAESE Mathematics HL (Core)3rd Edition(Text&CD)、HAESE Mathematics HL (Option) Calculus(Text&CD)
Economics	Economics Second Edition Jocelyn Bink & Ian Dorton IB Course Companion: Economics Second Edition Jocelyn Bink & Ian Dorton Pearson Baccalaureate Economics, Maley & Welker
Physics	Pearson Baccalaureate Physics Higher Level Print and eBook Bundle for the IB Diploma
Biology	「ワークブックで学ぶ生物学の基礎(第二版) 」、「ワークブックで学ぶ生物学実験の基礎 Skills in Biology」 Pearson, Pearson Baccalaureate Biology SL & HL 2007 & 2014
Environmental systems and Societies	Environmental Systems and Societies. Pearson Education Limited. 2010
MUSIC	The Enjoyment ofMusic 11th editionK. Forney & J.Machlis
TOK	Decoding Theory of Knowledge for the IB Diploma. Themes, Skills and AssessmentCambridge University Press

第１０章　認定後の対応

１０－１．定期評価訪問（再掲）

晴れてＩＢ認定校となった後も、学校は定期的に国際バカロレア機構のチェックを受けなければなりません。５年に一度実施される定期評価訪問[1]がそれに当たります。定期評価訪問の費用は、４，５７０ＳＧＤ（約３９万円）[2]です。

なお、定期評価訪問は、全ての学校が国際バカロレア機構による訪問を受けるわけではありません。訪問を受ける場合には、学校には一年前にその旨の連絡があり、訪問に際しては２－８に記載した確認訪問と同様の対応を行う必要があります。

一方、訪問を受けない場合でも、学校は書類による内部評価を提出し、国際バカロレア機構からその検討結果を受け取ることになります。（２－１０で既掲。）

１０－２．年間スケジュール（例）

学校の行事などにより多少の違いはありますが、ＤＰ履修者については以下のようなスケジュールで概ね進行していくものと考えられます。（もちろん、この例にならわなければならないものではありません。）

高校２年
４月～６月：通常授業
７月：通常授業、期末考査
８月：夏休み
９月～１０月：通常授業
１１月：通常授業
１２月：通常授業、冬休み
１月～３月：通常授業、期末考査

---

[1] 評価訪問（Evaluation Visit）：認定校となった後に行われる訪問のこと。５年に一度行われる。全ての学校が訪問を受けるわけではないが、訪問を受けない場合でも内部評価を提出する必要がある。

[2]金額は２０１５年のものであり、今後変更される可能性があります。また、本章の内容は２０１５年（平成２７年）９月１日（終値）時点のレート（１ＳＧＤ≒８４，５円）で計算しています。

高校３年
４月～６月：通常授業
７月：通常授業、ＤＰ模擬試験、期末考査、ＥＥ学内提出
８月：夏休み
９月～１０月：通常授業、ＥＥ・ＴＯＫ提出
１１月ＤＰ最終試験
１２月：通常授業、冬休み
１月：受験準備

〇必要に応じて進路説明会の機会を設けるのが一般的です。
〇上記のほか、適宜外部試験を行うのが一般的です。外部試験には、海外留学を考える生徒向けに実施するもの（ＳＡＴやＴＯＥＦＬ、ＩＥＬＴＳなど）と、国内の大学入試対策の模擬試験を実施するものが考えられます。

１０－３．大学入学者選抜への対応

ＤＰ資格を取得することで、生徒の進路選択の幅が従来に比べて広がることが考えられます。学校は、生徒の希望を斟酌し、積極的に国内・海外双方の大学の入試情報にアクセスする必要があります。ＤＰスコアを利用して大学入学者選抜に臨む場合、注意したいのは試験の実施時期と出願のタイミングです。

（高３の１１月にＤＰ試験を受験する場合）
１１月に試験を受ける場合、最終スコアが国際バカロレア機構から発表されるのは翌年の１月５日となります。しかし、特に国内大学においては、最終スコアの発表を待って出願すると期限に間に合わなくなる可能性があります。そこで多くの学校が活用するのが「予測スコア（ＰＧ：Predicted Grade）」です。
学校は、それまで生徒が提出したレポートなどの評価を総合的に判断し、独自に「予測スコア」を算出し国際バカロレア機構に提出します（１０月１０日が提出期限）。生徒はこの「予測スコア」を希望する大学に出願します。この時点で、大学は生徒の「予測スコア」を元に論文試験や面接試験を課し、合格ラインに到達していれば「条件付合格」を通知します。ここで言う「条件付」というのは、生徒が提出した「予測スコア」が、そのまま「最終スコア」として国際バカロレア機構から発表されれば、という意味です。「最終スコア」が「予測スコア」と同じ、あるいはほぼ同じという結果が国際バカロレア機構から大学に通知されれば、晴れて「合格」となります。

国内大学でＤＰスコアを活用する入試を実施している大学は、こうした措置を採っている大学がほとんどです（ＤＰ資格取得見込みで受験可能です）ので、詳細は受験を希望する大学までお問合せください。

（参考：高３の５月にＤＰ試験を受験する場合）

我が国の多くの学校においては、１１月試験が一般的ですが、インターナショナルスクールなどにおいては５月試験を実施するケースもあります。最終スコアが発表になるのが７月５日ですので、それまでに出願の必要がある場合は、学校の算出する「予測スコア」を用いて出願を行うことになります。この場合、「予測スコア」の国際バカロレア機構への提出期限は４月１０日です。

コラム⑤『予測スコア』

「予測スコアは信頼できるの？？」

多くのＩＢ生が受験で使う予測スコア。上で説明したとおり、学校が国際バカロレア機構からの公式発表の前に独自に算出するものですが、学校独自の算出となると、どうしても、学校ごとに数字が異なってきてしまう気がします。ＩＢは全世界に認定校がありますから、大学にとっても、あまりに国や地域、学校によってスコアの差が出てしまうと困ってしまいます。

そこで、国際バカロレア機構は予測スコアの誤差を最小限に抑えるため、学校に予測スコアの採点サンプルの提出を義務づけています。これにより、当該学校が「予測スコアを本来より高めに/低めに算出している」といった傾向を把握し、より正確なスコアの算出に努めているのです。

第１１章　よくある質問

※ここに記載した質問のほか、国際バカロレア機構のサイトでも、「ディプロマ資格プログラムに関するよくある質問」が掲載されています。
（http://www.ibo.org/globalassets/publications/faq-on-the-dp-jpn.pdf）

No.	質問	回答	解説
1. 申請など認定手続きにあたって			
1－1	新設校でIBの認定を取得しようと考えていますが、校舎がない段階で申請をすることはできますか。	DP⇒はい MYP/PYP⇒いいえ	DPでは、課程が開始していない状態、校舎がない状態であっても候補校申請を行うことは可能です。（国際バカロレア機構がアドバイスすることもできます。）しかし、MYP/PYPでは、実際に学校が運営されていなければ、申請することはできません。
1－2	建物や設備の基準や条件はありますか。	建物に関しては特にありませんが、 設備に関しては一部あります。	建物に関して、細かい基準や条件はありませんが、設備に関しては、より安全な学習環境を生徒に提供していく観点から、「IB DP科学科目のための科学実験室のガイドライン」があるほか、図書室の扱いについても若干の決まりがあります（詳しくは4－2を参照ください）。
1－3	申請を始める条件は他にありますか。	はい	候補校申請を行う前に、スクールインフォメーションフォームを提出し、学校の管理者（IB導入の責任者で、多くの場合校長または教頭）がIBのワークショップ（Administrator）を受講している必要があります。
1－4	MYP/PYPの場合も認定までに経るプロセスは同じですか？	はい	MYP/PYPの場合もDPと同様、スクールインフォメーションの提出→候補校申請→候補校への認定通知→コンサルタント訪問→認定校申請→確認訪問→認定通知という一連の流れは変わりません。ただし、WS受講対象者や受講のタイミング、学校の年会費などはプログラムにより異なってきますので、注意が必要です。

2. 授業を行うにあたって			
2－1	いつからIBの授業を始めることができますか。	DP⇒認定後に授業を始められます。 MYP/PYP⇒候補校として認定された後に、「授業の試行」として実施することができます。	DPでは、認定を受けた後でなければ授業を始めることが出来ません。一方で、MYP/PYPでは、候補校となればIBの「授業の試行」を始めることができます。 なお、上記のいずれにせよ、授業の実施に関しては国際バカロレア機構とよく相談し、特に学校の宣伝には細心の注意を払ってください。（詳しくは2－11を参照ください。）
2－2	日本語DPを選択した場合は、英語以外の授業は全て日本語で行って良いのですか。	いいえ	科目としての「英語」に加え、最低1科目は英語で授業を行う必要があります。
2－3	日本語DPを選択した場合でも、英語で行う授業を3科目以上設置することは可能ですか。	はい	学校の方針によって、複数設置することができます。
2－4	MYP/PYPは日本語で授業を行うことはできますか。	はい	MYP/PYPでは、第一言語で授業を行うことが一般的です。（ただし、PYPでは7歳から第二言語の授業を行うことが必須となります。） 学校の方針によって、英語で授業を行う科目を複数選択することもできます。
2－5	ひとつの学校内でIBコースと普通科など、コースを分けることはできますか。	DP⇒はい MYP/PYP⇒いいえ	DPは、コースに分けて、同学年のうち一部の生徒だけが授業を受けることができます。MYP/PYPでは、学校全体で認定を受けるため、全ての生徒がIBを受けることになります。

2－6	IBを選択した生徒とその他の生徒が一緒に授業を受けることができますか。	DP⇒はい MYP/PYP⇒いいえ	IBを選択している生徒とそのほかの生徒が一緒に授業を受けることはできます。（既存の教育課程と照らし合わせて、似ている分野などは、一緒に授業を行うことができます。）ただし、授業形態に関しては国際バカロレア機構と事前によく相談することが重要です。
2－7	既存の教科書を使用して授業を行うことはできますか。	はい	日本の検定教科書を用いるなど、IBの授業を行うに際しては学校が教材を選択できます（各科目の教員とコーディネータが相談して決めることになります）。
2－8	PYPは、3歳～12歳までの課程が全て揃っていなければ実施できないのですか？	いいえ	PYPは、最低2年間連続する課程があれば実施可能です。したがって、幼稚園段階のみで実施する、小学校段階のみで実施するといった方法も可能です。
2－9	DPコースにおける一クラスの生徒数は何人ですか？	特に決まっていません。	IBは学級規模を規定していませんが、『プログラム実施規準と実践要綱』ページ23のC3にある基準を満たす必要があります。実際に学級規模を決めるにあたっては、国際バカロレア機構と事前によく相談することが重要です。
3. その他			
3－1	国際バカロレア機構への支払方法について教えてください。	海外送金で対応ください	国際バカロレア機構への支払方法については、各学校が海外送金で対応します。海外送金に対応している銀行窓口、もしくは、各銀行がWEB上で海外送金を行うことができるサービスを提供していますので、そちらをご利用ください。なお、支払いの通貨はSGD（シンガポールドル）です。

3－2	ワークショップはいつ頃までに受講すればいいですか。	「Administrator」⇒候補校申請まで それ以外⇒確認訪問まで	「Administrator」は候補校申請を行うまでに受講する必要があります。DPコーディネータ・科目別ワークショップに関しては確認訪問までに受講する必要があります。
3－3	IBのスコアを活用した大学入学者選抜を受ける場合、卒業試験の時期によって、国際バカロレア機構からのスコアが間に合わないときは、大学入試を受けることができないのですか。	受験できます	大学入試の応募要件については、詳しくは各大学にお問い合わせください。一般的には、学校が各生徒に出す予測スコアを用いて、出願することができます。大学からスコアに関する「条件付きの」合格を得た生徒については、国際バカロレア機構からのスコアが当該条件を満たしている場合、正式に合格となります。（詳しくは10－3を参照ください）
3－4	日本語で読めるIB資料はありますか？	はい	国際バカロレア機構のページに、IB導入の手続きに関する資料や、科目ごとのカリキュラム・ガイドが日本語で翻訳され、掲載されています。全ての文書が翻訳されているわけではありませんが、導入の参考にしていただければと思います。 http://www.ibo.org/en/about-the-ib/the-ib-by-region/ib-asia-pacific/information-for-schools-in-japan/
3－5	DP資格の取得率を教えてください。	2014年の結果では、全世界のDP資格取得率が80．3％だったのに対し、日本での取得率は92．7％（うち日本人に限ると92．8％）でした。	日本国内のIB校における成績は、全世界と比較して高いことが分かります。

第１２章　国際バカロレア関連用語集

この章では、本手引きに掲載されている用語を中心に説明します。

（ア～オ）

○ＩＢ（アイビー）<International Baccalaureate>

International Baccalaureate（国際バカロレア）の略。教育内容を指すこともあれば、国際バカロレア機構を指すこともある。本手引きでは、教育内容を指す場合は「ＩＢ」、組織を指す場合は「国際バカロレア機構」と表記している。

○ＩＢＤＰ科学科目のための科学実験室についてのガイドライン

学校がどのような設備や器具を準備する必要があるのかを定めた文書。日本語版は「Resources for schools in Japan」に掲載されている。４－２参照。

○アクションプラン

候補校申請書類を構成する一つの文書。今後「プログラムの基準と実践要綱」に基づいて、学校がどのような取組を行っていくのかを記載するもの。２－３参照。

○アドミニストレータ

学校の管理者のことで、我が国においては通常校長や教頭を指す。該当者は、候補校申請までにアドミニストレータ対象のＷＳを受講しなくてはならない。３－３参照。

○ＡＰ（エーピー）<Advanced Placement>

非営利機関・カレッジボードが提供する教育プログラム。アメリカとカナダの高校において導入されている。ＡＰの授業の修了資格が、提携大学の単位として認められるもの。１－３参照。

○ＭＹＰ（エムワイピー）<Middle Years Programme>

ＩＢのプログラムの一つ。１１歳～１６歳を対象とする。

○ＯＣＣ（オンライン・カリキュラム・センター）

ＩＢに関する様々な書類を閲覧できるサイト。候補校になるとアカウントが与えられ、アクセスを許可される。

（カ～コ）

○外部評価

各科目における、最終試験およびそれに先だって提出するレポートによる評価のこと。各科目のスコアのうち、約７割がこれらの評価で構成される。第８章参照。

○学習者像（ＩＢの学習者像）（IB Learner Profile）

ＩＢが理想として考える人物像のこと。「探究する人・知識のある人、考える人、コミュニケーションができる人・信念を持つ人・心を開く人・思いやりのある人・挑戦する人・バランスのとれた人・振り返りができる人」の１０の特徴から構成される。１－１参照。

○確認訪問（Verification Visit）

認定校申請へ向けた最終段階で行われるＩＢ機構による訪問のこと。２－８参照。

○課題論文（エクステンデッド・エッセイ）<Extended Essay>

コア科目の一つ。履修科目に関連した研究分野について個人研究に取り組み、成果を4,000 語（日本語の場合は 8,000 字）の論文にまとめるもの。

○学校設定教科・科目

学習指導要領で定める教科・科目以外に、教育上の必要から学校独自に設定できる教科・科目のこと。７－１参照。

○カテゴリ１，２，３

ワークショップの開催レベルのことで、ＩＢの理解度・経験により分かれている。初めて参加する場合は、カテゴリ１を受講することとなる。３－３参照。

○関心校
候補校となる前段階の学校を指す。
○コア
ＤＰのカリキュラムの中で、いわゆる３要件と呼ばれる、TOK（知の理論）、EE（課題論文）、CAS（創造性/活動/奉仕）のこと。１－２参照。
○候補校<Candidate School>
候補校申請書類を提出し、国際バカロレア機構による書類検討を経て、候補校として認められた学校のこと。候補校年会費が必要となる。
○候補校申請（Application for Candidacy）
関心校が、候補校を目指して必要書類を提出すること。申請料が必要となる。２－３参照。２－３参照。
○国際バカロレア・デュアルランゲージ・ディプロマ連絡協議会
ＩＢ認定校および今後認定を目指す学校の間の情報共有・連絡調整を目的として設置された会議体のこと。事務局は東京学芸大学学務部国際課内に置かれている。
○国際バカロレア（ＩＢ）入試
ＩＢ資格の有無や、そのスコアなどによって合否判定を行う入学者選抜方法のこと。単に受験資格の一つとして記載しているだけではＩＢ入試とは呼ばない。１－３参照。
○コーディネータ
国際バカロレア機構や学校内部・外部との総合的な調整を担う教職員のこと。当該高校の常勤職員（特に教科の教員）が担うのが一般的。確認訪問までにコーディネータ対象のＷＳを受講しなければならない。３－１参照。
○コンサルタント
候補校になると、各学校に担当として就くことになる。学校は、コンサルタントとのやり取りを継続し、認定校を目指すことになる。２－５参照。
○コンサルタント訪問（Consultation Visit）
候補校になってからのコンサルタントによる訪問のこと。２－５参照。

（サ～ソ）

○受験料（評価料）
ＤＰ資格取得のための最終試験の受験料のこと。５－１参照。
○スクールインフォメーションフォーム（ＳＩＦ）
ＩＢに関心を持つ学校が、最初のプロセスとして無料で行う簡単な情報登録のこと。２－２参照。
○ＳＬ（スタンダードレベル）
ＤＰの各科目における、標準レベルの科目のこと。通常１５０時間の学習時間で構成される。
○世界で生きる教育推進支援財団
ＩＢを履修する学校・生徒の財政支援のため設立された財団。６－１参照。
○創造性・活動・奉仕（キャス）<CAS: Creativity/Activity/Service>
コアの一つ。創造的思考を伴う芸術などの活動、身体的活動、無報酬で自発的な交流活動といった体験的な学習に取り組むもの。

（タ～ト）

○知の理論（ティーオーケイ）<TOK: Theory of Knowledge>
コアの一つ。「知識の本質」について考え、知識の構築に関する問いを探究するもの。批判的思考を培い、生徒が自分なりのものの見方や、他人との違いを自覚できるよう促すもので、最低 100 時間の学習が目安となる。

○ＤＰ（ディーピー）<Diploma Programme>

　ＩＢのプログラムの一つ。１６歳～１９歳を対象とする。

○特別免許状

　社会人など優れた知識・経験を持つ人材を対象に、都道府県教育委員会が授与する免許状のこと。３－３参照。

（ナ～ノ）

○内部評価

　各科目における、レポートや口頭試問による評価のこと。各科目のスコアのうち、約３割がこれらの評価で構成される。第８章参照。

○日本語ＤＰ

　ＩＢカリキュラムの科目の一部を日本語でも実施可能とするプログラムのこと。１－２参照。

○認定校（IB World School）

　ＩＢ教育を実施できる学校のこと。

○認定校申請

　確認訪問のあと、候補校が認定校を目指して行う申請のこと。申請費は不要。２－６参照。

（ハ～ホ）

○ＨＬ（ハイレベル）

　ＤＰの各科目における、上級レベルの科目のこと。通常２４０時間の学習時間で構成される。

○評価訪問<Evaluation Visit>

　認定校となった後に行われる訪問のこと。５年に一度行われる。全ての学校が訪問を受けるわけではないが、訪問を受けない場合でも内部評価を提出する必要がある。２－１０または１０－１参照。

○ＰＹＰ（ピーワイピー）<Primary Years Programme>

　ＩＢのプログラムの一つ。３歳～１２歳を対象とする。

○フル・ディプロマ

　６科目と３要件を全て履修し、最終スコアで２４点以上を取得すると認められる資格のこと。通常、ＩＢ資格、ＤＰ資格といった場合は、このフル・ディプロマを指す。

（ヤ～ヨ）

○ＵＣＡＳ（ユーキャス）<University and College Admissions Service>

　英国入試機構。英国の非営利機関であり、英国内の大学への入試業務を一括処理している。国内外の様々な資格を点数化し、相互の比較を可能にしており、ＤＰスコアもＡレベルなど英国国内の試験と換算可能となっている。

（ラ～ロ、ワ）

○ワークショップ（ＷＳ）

　ＩＢ教育に携わる教職員等を対象にＩＢにより開講される研修のこと。そのうち、最低限受講の必要があるのはアドミニストレータＷＳ、コーディネータＷＳおよび各科目のＷＳである。３－３参照。

第１３章　お問合せのための連絡先

国際バカロレアについてご不明な点がありましたら、お気軽に下記までお問い合わせください。

① 文部科学省の窓口（代表 TEL: 03-5253-4111）

○ＩＢ全般について、本マニュアルについて等
文部科学省大臣官房国際課外国人教育政策係
MAIL: kokusai@mext.go.jp

○ＩＢカリキュラムと学習指導要領との対応関係について
文部科学省初等中等教育局教育課程課

○特別免許状について
文部科学省初等中等教育局教職員課

○大学入学者選抜について
文部科学省高等教育局大学振興課

② 国際バカロレア機構アジア太平洋地域日本担当地域開発マネージャー

○星野あゆみ（東京学芸大学附属国際中等教育学校　副校長）
MAIL: ayumi.hoshino@ibo.org

○また、国際バカロレア機構のウェブサイト上の IB Answers（https://ibanswers.ibo.org/）からもご質問いただけます（ただし英語）

このほか、ＩＢ認定校を目指す学校間の情報共有として、
「国際バカロレア機構デュアルランゲージディプロマ連絡協議会」が東京学芸大学学務部国際課内に設置されています。加入をご希望される場合は、下記までご連絡ください。

TEL: 042-329-7849
FAX: 042-329-7765
MAIL: dpoffice@u-gakugei.ac.jp

巻　末　資　料

国際バカロレアを活用した大学入試（例）

平成 27 年 5 月現在

１．導入済

●筑波大学「国際バカロレア特別入試」
人文・文化学群、社会・国際学群、人間学群、生命環境学群、理工学群、情報学群、医学群、体育専門学群、芸術専門学群
※全学群で導入済。

●東京外国語大学「帰国生等特別推薦入試」
国際社会学部
※言語文化学部及び構想中の国際日本学部（仮称）においても導入を検討。

●大阪大学「学部英語コース特別入試」
理学部・工学部・基礎工学部（化学・生物学複合メジャーコース）、人間科学部（人間科学コース）
※平成 29 年度からは、グローバルアドミッションズオフィス（GAO）入試において、全学部に拡大予定。

●岡山大学「国際バカロレア入試」
文学部、教育学部、法学部、経済学部、理学部、医学部、歯学部、薬学部、工学部、環境理工学部、農学部、マッチングプログラムコース
※全学部で導入済。

●国際教養大学「AO・IB・高校留学生入試」
国際教養学部

●横浜市立大学「国際バカロレア入試」
国際総合学部（国際教養学系、国際都市学系、経営科学系、理学系）

●関西学院大学「グローバル入試（IB 入試／グローバルサイエンティスト・エンジニア入試」
神学部、文学部、社会学部、法学部、経済学部、商学部、人間福祉学部、国際学部、教育学部、総合政策学部、理工学部
※全学部で導入済。

●国際基督教大学「４月入学帰国生特別入試」、「９月入学書類選考」
教養学部
※国内の IB 校も出願資格の「外国の教育制度」に該当し、出願が可能。

●慶應義塾大学「国際バカロレア資格取得者対象入試」、「AO 入試（IB 方式）」
法学部、総合政策学部、環境情報学部
※他学部においても導入を検討。

●順天堂大学「国際バカロレア入試」
医学部（国際臨床医・研究医枠）、国際教養学部

●上智大学
国際教養学部、理工学部（物質生命理工学科グリーンサイエンスコース、機能創造学科グリーンエンジニアコース）

※平成 28 年度より、全学部に拡大予定。

●玉川大学「国際バカロレア AO 型入学審査」
文学部、農学部、工学部、経営学部、教育学部、芸術学部、リベラルアーツ学部、観光学部
※全学部で導入済。

●立教大学「自由選抜入試」
経営学部
※他学部、全学部的な導入に向けて検討。

●立命館アジア太平洋大学
アジア太平洋学部、国際経営学部
※全学部で導入済。

●早稲田大学「AO 入試」等
政治経済学部、国際教養学部、英語による学位取得プログラム（政治経済学部、社会科学部、基幹理工学部・創造理工学部・先進理工学部）
※政治経済学部では、平成 28 年度より AO 入試について「グローバル入学試験」に改める予定。
※平成 32 年までに学科試験を課さない AO 入試を設置し、IB 資格取得者の受入れを検討。

２．導入予定／検討中

●北海道大学「国際総合入試枠」（平成 30 年度）

●東北大学「国際バカロレア入試」（平成 29 年度）
文学部、法学部、理学部、医学部医学科、工学部、農学部

●千葉大学
※新たに設置する“新”国際教養学部において、IB による特別入試等を実施予定。同学部入学後に、理学部、工学部、園芸学部、文学部、教育学部、法政経学部に異動することが可能であり、全学の 2/3 に当たる 6 学部で実施予定。

●東京大学「推薦入試」（平成 28 年度）
※法学部、教養学部、工学部において推薦要件に合致することを証明する根拠となる書類例としてＩＢ成績証明書を明示するとともに、他学部においても論文等を重視。

●東京医科歯科大学

●東京芸術大学（平成 28 年度目途）

●東京工業大学

●お茶の水女子大学「新型 AO 入試（新フンボルト入試）」

●長岡技術科学大学

●金沢大学（平成 30 年度以降）

●名古屋大学

●豊橋技術科学大学

※全課程・専攻に設置予定の「グローバル技術科学アーキテクト養成コース」の AO 入試において導入予定。

●大阪市立大学「国際バカロレア入試」（平成 28 年度）
文学部

●京都大学「特色入試」（平成 28 年度）
※全学部において、提出書類の中に記載する高校在学中の顕著な活動歴の例として、ＩＢの成績も明示（IB の成績を評価対象として位置づけて、積極的に活用）。

●京都工芸繊維大学「ダビンチ（AO）入試」（平成 29 年度以降）
※IB 資格取得者を対象とした特別選抜を平成 29 年度以降に導入。

●広島大学
※平成 28 年度から、IB 資格取得者に対し、以下の 3 つの入試フレームを設定。
「IB 方式グローバル AO 入試」：英語のみで卒業できる学部コースへの入学者を対象。
「IB 方式研究社養成コース AO 入試」：学部・大学院一環教育の研究社養成コース入学者を対象。
「IB 方式グローバル特別入試」：全学部で実施。

●九州大学（平成 29 年度）
国際教養学部（仮称。平成 29 年度に設置を計画）

●熊本大学
※当初は新設学部の未来創成学部において開始し、段階的に、構想中の既設学部におけるグローバルエリート育成特別コースにおいて実施予定。

●会津大学

●芝浦工業大学
※平成 32 年度から IB 資格取得者が入学できる英語コースの整備に着手し、受入れのための具体的な体制を整える予定。

●創価大学
※平成 28 年度入試より、IB 認定校を指定校として採用。
※平成 30 年度より、全学部の公募推薦入試において IB スコアを活用。

●東洋大学（平成 28 年度）
※全学部で実施予定。

●法政大学「国際バカロレア利用自己推薦特別入試」（平成 28 年度）
文学部 哲学科・英文学科、キャリアデザイン学部 キャリアデザイン学科、国際文化学部 国際文化学科

●明治大学「国際バカロレア入学試験（仮称）」

●立命館大学（平成 27 年度以降）

【注】
・日本の学校の卒業生を対象としているものを記載しています（帰国生や留学生に対象を限定しているものを除く）。
・本資料は、各大学の募集要項、文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」採択調書その他の公表資料に基づき文部科学省にて作成したものであり、必ずしも全ての情報を網羅しているわけではありません。また、実際の出願等に当たっては、各自、最新の情報等を確認してください。

英国等の活用事例（入試）

- 英国、オーストラリア、インド、ニュージーランド、スペイン等では、中央機関等がIBを含む各資格のスコア等の統一的な換算表を作成。
- 英国では、英国入試機構（UCAS）が、IBスコアを独自のTariff Pointに置き換えて換算表を作成するとともに、大学ごとに出願が必要なIBスコアの目安も作成し、受験者に提供。（以下、英国の例）

IB スコア	Tariff Points
45	720
44	698
43	676
42	654
41	632
40	611

参考：http://www.ucas.com/how-it-all-works/explore-your-options/entry-requirements/tariff-tables/IBdip

英国の活用事例（入試）
オックスフォード大学

コース名	IB スコアの目安（全体）	IB スコアの目安（科目）
生物化学	38～40	—
法学	38～40	—
人間科学	38～40	—
史学と政治学	38～40	—
数学と統計学	38～40	—
薬学	38～40	—
臨床心理学	38～40	—
化学	38～40	—
物理	38～40	—

英国の活用事例（入試）
ケンブリッジ大学

コース名	IB スコアの目安（全体）	IB スコアの目安（科目）
自然科学	40～42	HLで7,7,6または7,7,7を含む
哲学	40～42	HLで7,7,6または7,7,7を含む
地理学	40～42	HLで7,7,6または7,7,7を含む
音楽	40～42	HLで7,7,6または7,7,7を含む
神学と宗教学	40～42	HLで7,7,6または7,7,7を含む
史学	40～42	HLで7,7,6または7,7,7を含む
古典：ギリシャとラテン	40～42	HLで7,7,6または7,7,7を含む

英国の活用事例（入試）
キングス・カレッジ・ロンドン

コース名	IB スコアの目安（全体）	IB スコアの目安（科目）
物理（医学への応用）	38	数学と物理のHLで5
数学	38	数学のHLで6
古代史	38	HLの3つの科目で6
宗教、哲学、倫理学	36	HLの3つの科目で6,6,5
生理学	36	化学と生物学のHLの3つの科目で6,6,5
栄養学	34	化学と生物学のHLの3つの科目で6,5,5
生化学	36	化学と生物学のHLの3つの科目で6,6,5

米国の活用事例（入試）

- 各大学が独自のアドミッションポリシーに基づき選抜を実施
- 特に競争性の高い大学を中心に、SATといった共通試験の成績等に加え、各大学によってIBの履修をプラス材料として推奨。
- 入学後の科目履修免除等の特典付与にも活用。
  （例）UCLA：上級レベル科目のスコアが5の場合、
  ほとんどのIB資格取得者に単位が与えられる。

参考：http://www.ucas.com/how-it-all-works/explore-your-options/entry-requirements/tariff-tables/IBdip

米国の活用事例（入試）

ボストン大学	
出願要件等	・ 高校において15単位（通年）を習得することが要件とされ、20単位の習得が推奨されている。20単位には、英語（4）、数学（3～4）、社会科学（3～4）、科学（3～4うち実験科学3～4）外国語（2～4）が含まれる。 ・ アドバンストプレイスメント（AP）や国際バカロレア（IB）を含む大学進学予備プログラムの習得も要件とされており、その成績が最も重要とされている。
出願書類等	・ SAT reasoning又はACT with Writingの提出が求められる（学科によってはSAT教科テスト2科目も必要。） ・ 各大学共通願書の他、ボストン大学用願書、高校内申書、高校3年生前期の成績、教員1名からの評価書、正式な高校の成績証明書。
合否判定方式	・ 総合的な評価であり、高校の成績証明書、標準試験の得点、推薦状、エッセイ、課外活動の5つが選抜資料。最も重要な資料は高校の成績証明書とされる。 ・ 高校におけるGPAでは、APやIBなど大学進学予備プログラムをどの程度受けているかという履修科目選択の積極さがより重要とされている。

参考：大学入試センター入学者選抜研究機構入試評価部門報告書「大学入試の標準化、多様化、及び精密化」（平成25年3月）より、文部科学省作成

米国の活用事例（入試）

ハーバード大学	
出願要件等	・ 高校において21単位（通年）を習得することが勧められている。21単位には、英語（4）、数学（4）、社会科学（3）、歴史（2）、科学（4）、外国語（4）が含まれる。 ・ アドバンストプレイスメント（AP）や国際バカロレア（IB）を含む大学進学予備プログラムの習得も推奨されている。
出願書類等	・ SAT reasoningまたはACT with Writing、SAT教科テストの2科目の提出が求められる。 ・ 各大学共通願書の他、大学独自の願書、高校内申書、高校3年生前期の成績、教員2名からの評価書、正式な高校成績証明書。
合否判定方式	・ 高校での学業達成、教師による推薦状、標準試験の成績の順に重要であるとされている。 ・ 卒業生による面接は、海外の実施が難しい場合を除き推奨されている。面接の結果、学業上の成果、関心領域、課外活動、性格等について定性的な報告書が作成される。 ・ 教師による推薦状では、主に学生の学習に対する姿勢、他の学生との関わり方、運動能力・芸術など得意な才能についての情報を得ることに主眼が置かれている。

参考：大学入試センター入学者選抜研究機構入試評価部門報告書「大学入試の標準化、多様化、及び精密化」（平成25年3月）より、文部科学省作成

米国の活用事例（入試）

ペンシルバニア州立大学（ユニバーシティパーク校）	
出願要件等	・ 高校において英語（4単位）、数学（3）、科学（3）、社会科学（3）、外国語（2）を含む合計15単位以上の修得が必要。 ・ アドバンスト・プレイスメント（AP）や国際バカロレア（IB）等を含む大学進学予備プログラムの修得を推奨。
出願書類等	・ SAT又はACTの成績、高校の成績証明書、大学独自の願書（エッセイを含む）
合否判定方式	・ 高校の成績を2／3、SAT又はACTの成績を1／3の比重で得点化し、一定の基準以上の者を合格判定。 ・ 高校の成績の評価においてAPやIB等の成績があれば加味。 ・ 高校の成績の学校間格差の調整は行わず。 ・ SAT等の成績よりも高校の成績を重視するのは、 ①1日の試験の結果より長い時間をかけて得たものを重視 ②裕福な家庭の子弟はSAT等の準備コースに入り対策を 講じており、SAT等の成績は家庭の経済状況の影響を受けることなどが理由。 ・ 優等学位プログラムや医学特別進学課程を希望する入学志願者の場合は、エッセイや教師の評価書、奉仕活動の経験等も加味して合否判定。

参考：大学入試センター入学者選抜研究機構入試評価部門報告書「大学入試の標準化、多様化、及び精密化」（平成25年3月）より、文部科学省作成

米国の活用事例（入試）

ブラウン大学（私立）	
出願要件等	・ 高校において、英語（4単位）、数学（4）、科学（3（実験科学2を含む））、歴史（2）、外国語（4）、音楽・美術（1）、その他（1）を含む19単位以上の修得を推奨。
出願書類等	・ SAT又はACTの成績（SATⅡ2科目を含む）、高校3年生前期の成績、高校の内申書、教師の評価書（2名分）、大学共通願書、大学独自の願書（エッセイを含む）
合否判定方式	・SAT又はACTの成績、高校の成績、エッセイ、教師の評価等を総合的に判断（それぞれの得点化はしない）。 ・ 個々の選抜資料についての明確な重み付けは設定されておらず、3人の職員それぞれが合否を総合的に判断。最終的には、この評価を参照しつつ20名で構成される委員会における投票によって合否を決定。 ・ **高校における履修科目のレベルの高さ、アドバンスト・プレイスメント（AP）や国際バカロレア（IB）等を含む大学進学予備プログラムの成績を最重要視**。 ・ SAT等は家庭の経済状況の影響を受けることも審査の際に考慮。 ・ 学生集団の多様性確保には配慮（ただし特別の基準、枠等は設けず）。

参考：大学入試センター入学者選抜研究機構入試評価部門報告書「大学入試の標準化、多様化、及び精密化」（平成25年3月）より、文部科学省作成

米国の活用事例（単位認定等）

ハーバード大学

- 上級レベル科目のスコアが7（満点）の場合、一部科目の履修免除（単位認定）
- 上級レベル科目のスコアが3つある場合、速習プログラムへの参加資格

コロンビア大学

- 上級レベル科目のスコアが6又は7の場合、各科目につき6単位（最大16単位）が与えられる（学科で認められている場合）

カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）

- 上級レベル科目のスコアが5の場合、ほとんどのIB資格取得者に単位が与えられる（専門分野により異なる）

ディプロマプログラム（ＤＰ）の「基準」「実践要綱」および「要件」

セクションＡ：理念

【基準Ａ】

学校の教育上の信念と価値観がＩＢの理念を反映しているか

【実践要綱】

1. 学校の掲げる使命と理念が、ＩＢの使命と理念に一致すること
2. 学校運営組織、管理職、教育活動全般の責任者、およびスタッフが、ＩＢの理念への理解を示すこと
3. 学校コミュニティー全体が、プログラムを理解し、責任をもって取り組むこと
4. 学校は、学校コミュニティー全体において、国際的な視野の育成を図り、「ＩＢの学習者像」に示される人物像の奨励に努めること
5. 学校は、学校コミュニティーの内外で責任ある行動を奨励すること
6. 学校は、理解と尊重に基づいた開かれたコミュニケーションを推進すること
7. 学校は、母語、学校所在地の言語、その他の言語を含めた言語学習を重視すること
8. 学校は、世界に広がるＩＢコミュニティーに参加すること
9. 学校は、ＩＢプログラムおよびＩＢの理念に生徒がアクセスできるよう支援すること

【ＤＰの要件】

a. 学校は、「国際バカロレア資格」（ＩＢ資格）の取得を目指す「フルディプロマ」としてＤＰを提供し、生徒たちにできるだけ、個々のＤＰ科目の履修だけではなく、ＩＢ資格の取得に挑戦するよう働きかけること

b. 学校は、ＤＰでの教育体験を通じて成長を遂げることができる生徒全員に対して、ＩＢ資格やＤＰ科目へのアクセスを奨励すること

c. 学校は、さまざまな方法を実施して生徒たちがＩＢ資格の取得に挑戦するよう奨励すること

セクションB：組織

【基準B1】リーダーシップと体制

学校のリーダーシップと管理体制がＩＢプログラムの実施を保証しているか

【実践要綱】

1. 学校は、実施中のプログラムとその発展について常に学校運営組織に伝える仕組みを構築すること
2. 学校は、プログラムの実施を支援する運営・指導体制を構築すること
3. 校長とプログラムコーディネーターは、プログラムの理念に沿って教育面でのリーダーシップを発揮すること
4. 学校は、プログラムコーディネーターを任命し、業務内容、担当授業時間数軽減措置を定め、職責を全うするための支援とリソースを提供すること
5. 学校は、プログラムを支援するための方針と手順を策定し、実施すること

【ＤＰの要件】

a. 学校は、入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）によって、学校への入学とＤＰの履修を認める条件を明らかにすること
b. 学校は、ＩＢが求める言語方針に合致する言語方針を策定し、実施すること
c. 学校は、ＩＢが求める「インクルーシブ」な教育／「特別な教育的ニーズ」のある生徒についての方針と、学校の入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）に合致する方針を策定し、実施すること
d. 学校は、ＩＢが求める「学問的誠実性」（academic honesty）に関する方針に合致する方針を策定し、実施すること
e. 学校は、ＤＰにおけるすべての評価の実施に関してＩＢの規定と手順を順守すること

6. 学校は、プログラムの継続的な実施と発展が可能な仕組みを整えること
7. 学校は、すべての関係者が参加するプログラム評価を実施すること

【基準B2】 リソースと支援

学校のリソースと支援体制がＩＢプログラムの実施を保証しているか

【実践要綱】

1. 学校運営組織は、プログラムの実施と継続的発展のために予算を割りあてること

【ＤＰの要件】

a. 予算措置には、「創造性・活動・奉仕」（ＣＡＳ）プログラムのための適切なリソースと監督、およびＣＡＳコーディネーターの任命などにかかる諸費用も含むこと

b. 予算措置には、「知の理論」（ＴＯＫ）の２年間の実施のための適切なリソースにかかる諸費用も含むこと

2. 学校は、プログラムの実施のために適格なスタッフを配置すること

3. 学校は、教師や管理職が必ずＩＢ認定の教員研修を受けるようにすること

【ＤＰの要件】

a. 学校は、認定時およびプログラム評価時に、ＤＰに関連したＩＢ認定の教員研修についての要件を満たしていること

4. 学校は、教師が協力して授業計画などを策定する「協働設計」（collaborative planning）や「振り返り」（reflection）に専念できる時間を確保すること

5. 校内およびネット上の学習環境や、施設、リソース、専門機器類を、プログラムの実施に活用すること

【ＤＰの要件】

a. 「理科」（グループ４）および「芸術」（グループ６）の科目の実施に必要な実験室と特別教室は、安全で効果的な学習環境であること

b. プログラムの実施を支援する、適切な情報技術（ＩＴ）施設を設置すること

c. 学校は、試験問題と試験用備品を保管するために、責任ある立場にある教職員以外は立ち入りできない安全な保管場所を確保すること

6. 図書館、マルチメディア、およびリソースが、プログラムの実施において中心的役割を果たすこと

【ＤＰの要件】

a. 図書館またはメディアセンターは、ＤＰの実施を支援するのに必要な、量的に十分で、かつ内容的に適切な資料を備えていること

7. 学校は、グローバルな諸問題や多様なものの見方に関する情報にアクセスできるようにすること

8. 学校は、学習に関するニーズや「特別な教育的ニーズ」のある生徒およびその担当教師に支援を提供すること

9. 学校は、プログラムの期間中、生徒にガイダンスとカウンセリングを提供できる仕組みを整えること

【ＤＰの要件】
a. 学校は、生徒に対して、卒業後進路に関する指導を実施すること

10. 生徒のスケジュールや時間割を、プログラムの要件を満たすように作成すること

【ＤＰの要件】
a. 標準レベル（ＳＬ）と上級レベル（ＨＬ）のいずれの科目についても、それぞれ推奨されている授業時間数を確保したスケジュールを作成すること
b. 「知の理論」（ＴＯＫ）については２年間をかけて履修するスケジュールを作成すること
c. ＤＰにおける学習の同時並行性を尊重したスケジュールを作成すること

11. 学校は、プログラムの一環として行われる学習を充実させるため、地域社会のもつリソースや専門性などを活用すること
12. 学校は、実施しているプログラムに応じて、ＰＹＰでの「発表会（エキシビション）」、ＭＹＰでの「パーソナルプロジェクト」（第３年次もしくは第４年次でＭＹＰを修了する場合は「コミュニティープロジェクト」）、ＤＰでの「課題論文」（ＥＥ）、ＩＢＣＣでの「振り返り（リフレクティブ）プロジェクト」に取り組むにあたって全児童生徒のためのリソースを確保すること

セクションＣ：カリキュラム

【基準Ｃ1】「協働設計」

「協働設計」と「振り返り」がＩＢプログラムの実施を支えているか

【実践要綱】

1. 「協働設計」と「振り返り」は、プログラムの要件を踏まえて行われること

【ＤＰの要件】
a. 「協働設計」と「振り返り」に、「知の理論」（ＴＯＫ）と各科目の関連づけを含めること
b. 「協働設計」と「振り返り」を通じて、科目間のつながりと関係性を探究し、さまざまな教科で共有されている知識、理解およびスキルを強化させること

2. 「協働設計」と「振り返り」は、定期的かつ体系的に行われること

3. 「協働設計」と「振り返り」は、学年縦断的および教科横断的な連続性の中で行われること
4. 「協働設計」と「振り返り」を通じて、すべての教師が必ず生徒の学習経験を総合的に把握しているようにすること
5. 「協働設計」と「振り返り」は、あらかじめ合意された学習到達目標に基づいて行われること
6. 「協働設計」と「振り返り」は、生徒の学習ニーズと学習スタイルの違いを考慮に入れて行われること
7. 「協働設計」と「振り返り」は、生徒の学習成果物と学習に対する評価に基づいて行われること
8. 「協働設計」と「振り返り」は、生徒の言語能力の発達にすべての教師が責任を負っていることを認識して行われること
9. 「協働設計」と「振り返り」は、「ＩＢの学習者像」に示される人物像を踏まえて行われること

注： 「協働設計」と「振り返り」の２つのプロセスは相互に関係しているので、まとめて１つの概念として用いています。

【基準Ｃ2】「指導計画」

学校の「指導計画」がＩＢの理念を反映しているか

【実践要綱】

1. 「指導計画」(written curriculum)は、包括的であること、また、プログラムの要件に沿って作成されること

> **【ＤＰの要件】**
> a. カリキュラムは、各教科と「コア」(必修３要件)のねらい、および目標を達成できるように作成されること
> b. カリキュラムは、学習の同時並行性が実現されるように作成されること
> c. カリキュラムは、生徒が科目を適切に選択できるように、バランス良く作成されること
> d. 学校は、開講される各科目および「知の理論」(ＴＯＫ)について独自のコース内容を開発すること

2. 「指導計画」は、学校コミュニティー全体に開示されること
3. 「指導計画」は、生徒のこれまでの学習経験を踏まえて作成されること
4. 「指導計画」は、習得に向けて長期的に取り組むべき知識、概念、スキル、および態度を特定したものであること
5. 「指導計画」は、生徒が自分自身および他者のニーズに対応して有意義な行動をとれるようなものであること

6. 「指導計画」は、生徒にとって関連のある経験を取り入れたものであること
7. 「指導計画」は、個人、地域社会、国、および世界の諸課題に対して意識を高めるよう奨励するものであること
8. 「指導計画」は、人間の共通性、多様性、および多元的なものの見方についての振り返りを行う機会を提供するものであること
9. 「指導計画」は、最新のＩＢ刊行物に準拠すること、また、プログラムの改訂を取り入れるために、定期的な見直しを行うこと
10. 「指導計画」は、プログラムを支援するために学校が策定した方針を取り入れたものであること
11. 「指導計画」は、「ＩＢの学習者像」に示されている人物像の具現化を目指すものであること

【基準Ｃ3】「指導」と「学習」

「指導」と「学習」がＩＢの理念を反映しているか

【実践要綱】

1. 「指導」と「学習」は、プログラムの要件に適合していること

> **【ＤＰの要件】**
> a. 学校における「指導」と「学習」は、各科目のねらいと目標のすべてを踏まえて行われること

2. 「指導」と「学習」は、生徒が「探究する人」「考える人」として関わるようにするものであること
3. 「指導」と「学習」は、生徒の「すでに知っていること」「できること」を踏まえて構築されること
4. 「指導」と「学習」は、「学問的誠実性」(academic honesty)の理解と実践を奨励するものであること
5. 「指導」と「学習」は、生徒が自分の学習に積極的に責任をもつことができるよう支援するものであること
6. 「指導」と「学習」は、人間の共通性、多様性、および多元的なものの見方に目を向けたものであること
7. 「指導」と「学習」は、母語以外の言語で学習している生徒のニーズを含め、言語に関する生徒の多様なニーズに対応するものであること
8. 「指導」と「学習」は、生徒の言語能力の発達にすべての教師が責任をもって取り組んでいるものであること
9. 「指導」と「学習」は、幅広い多様な方法を用いたものであること

10. 「指導」と「学習」は、生徒の学習ニーズと学習スタイルに応じて、異なる指導方法を用いたものであること
11. 「指導」と「学習」は、情報技術（ＩＴ）を含めた多様なリソースを取り入れたものであること
12. 「指導」と「学習」は、生徒が自分自身および他者のニーズに対応して有意義な行動をとれるように、生徒の態度とスキルを養うものであること
13. 「指導」と「学習」は、「どのように」「何を」「なぜ」学んでいるのかについて生徒自身が振り返りをするよう働きかけるものであること
14. 「指導」と「学習」は、理解と尊重に基づいた、意欲を喚起する学習環境を育むものであること
15. 「指導」と「学習」は、生徒がさまざまな方法で、学習を通じて身につけた成果を示すよう促すものであること
16. 「指導」と「学習」は、「ＩＢの学習者像」に示されている人物像の具現化を目指すものであること

注： 「指導」と「学習」の２つのプロセスは相互に関係しているので、まとめて１つの概念として用いています。

【基準Ｃ4】評価

学校における評価法がＩＢの評価に関する考え方を反映しているか

【実践要綱】

1. 学校における評価法は、プログラムの要件に適合していること

> **【ＤＰの要件】**
> a. 生徒の学習に対する評価は、各科目ごとの目標と評価規準に基づいて行われること

2. 学校は、評価に関する考え方、方針、および手順を学校コミュニティー全体に伝えること
3. 学校は、生徒の学習を評価するために、多様な方法とツールを用いること
4. 学校は、生徒の学習状況について知らせ、学習をより良いものにするために、生徒にフィードバックすること
5. 学校は、各プログラムごとの評価に関する考え方に従いながら、生徒の成長の様子を記録する仕組みを整えること
6. 学校は、各プログラムごとの評価に関する考え方に従いながら、生徒の成長の様子を伝える仕組みを整えること
7. 学校は、「指導」と「学習」の参考とするため、評価データを分析すること

8. 学校は、生徒に対して自分の学習成果物の評価に参加し、その評価を振り返るための機会を与えること
9. 学校は、実施しているプログラムに応じて、ＰＹＰでの「発表会（エキシビション）」、ＭＹＰでの「パーソナルプロジェクト」（第３年次もしくは第４年次でＭＹＰを修了する場合は「コミュニティープロジェクト」）、ＤＰでの「課題論文」（ＥＥ）、ＩＢＣＣでの「振り返り（リフレクション）プロジェクト」の完成を通じて、全児童生徒が自分自身の学習を総括し、発表する仕組みを整えること